

## 主催者の開催辞

木宮正史(東京大学韓国学研究部門 部門長)

先日、韓国において「和解・癒やし財団(화해 치유 재단)」が設立され、それに日本政府から10億円の拠出が行われることが決まり、昨年末の政府間合意が具体的に動き出したように思います。もちろん、本日の参加者、聴衆のみなさまの中には、政府間合意自体、不十分なものであるというご指摘もあるかと思えます。具体的に、当事者はもちろん、支援者たちの多くも、合意自体は不当であり、問題解決にはならないと主張しています。また、韓国においては、評価する人よりも評価しない人の方が多いという世論調査結果も出ています。確かに、日本政府の法的責任とそれに基づく賠償を求めるという従来からの主張を前提とすると、この合意は不十分なものと言わざるを得ないという主張はもっともなことだと理解できます。

他方で、日本社会の状況を考えると、それほど楽観的にばかりは考えられないというのも正直なところだと思います。日本社会の中には、慰安婦問題自体を、韓国の反日世論の動員手段に過ぎないとみる向きも多いように思います。韓国社会は、日本を批判することを目的としてこの問題を取り上げるのであって、それ自体が目的になっている。したがって、この問題で何の配慮をしようが受け入れられることはないだろう。したがって、何かを配慮しようとする自体が無駄であるし、むしろ、変な期待を抱かせるだけなので、何もしない方がよいという主張にもなりかねません。確かに、元慰安婦の方たちには大変申し訳ないことをしてしまったという気持ちを持っている。しかし、それはそれとして、それを材料に、日本人全体があたかも「不道德な人間の集まり」であるかのように攻撃しているのではないのか。そうした受け止め方をしている人が、現在の日本社会には実は多いのではないかと想像します。もちろん、それこそ「被害妄想」なのかもしれません。何も、そこまで言っていないとおっしゃられるかもしれません。

ただ、なぜ、日本社会が、この問題に対して、人権問題として真摯に考えようとはしないという意味で「鈍感」なのか。また別の意味で、国家の名誉を傷つけられているという被害者意識では「敏感」なのかを理解する必要があります。ここで誤解のないように申し上げておきますが、そうした日本社会の反応を指摘することは、それが正当であると主張することでは全くありません。むしろ、正反対です。そうした理解を試みることによって、そうした認識のどこに問題があるのか、そして、それにどのように働きかけるのか、そうした戦略を考えることが可能となります。私は、この問題に関する、同じような知的作業を、韓国の研究者、運動家を含む有識者の方にも、日本に対して、そして韓国においても、していただけたらと思います。これも、誤解のないように申し上げておきますと、韓国社会も反省しろということを申し上げているのでは決してありません。そうではなく、日韓社

会双方の、そうした自省的な姿勢こそが、この問題に関する前向きな取り組みを生み出すことができるのではないかと確信するからです。

最近、よく耳にするようになった「歴史戦」つまり「歴史戦争」という見方があります。歴史認識をめぐってどちらの方が正しいのかを競い合う、それを二国間関係のみならず、国際社会に向けて競い合うという意味です。最近の日韓関係を振り返ると、歴史戦を戦おうとする「勇ましい人たちが」日韓ともに増えているように思います。特に、近年は、日韓関係が少なくとも日本から見ると垂直的な関係から水平的な関係に変容してきたことを受けて、日本も「負けてはならない」というように考える人たちが増えているように思います。私は「歴史戦」という発想、それ自体を否定するつもりはありません。国家間に対立争点がある場合、その争点をめぐって相互の立場を主張し合い、どちらの方が説得力を持つのかを競い合うということは必要だと思います。

しかし、少なくとも、慰安婦問題に関しては、日韓の「歴史戦」は「停戦協定」を締結すべきではないかと考えます。私は、昨年末の日韓政府間合意は、少なくとも「停戦協定」ではなかったかと思っています。なぜ、「歴史戦」を停戦する必要があると考えるのか。それは、当事者の元慰安婦ハルモニたちが高齢であり、限られた時間の中で可視的な成果を収めない限りは、問題がほぼ半永久化されてしまうからです。この問題の半永久化は、誰にとってもプラスにはならないと考えるからです。私は、この問題を私たちの記憶にずっととどめておくことは必要だと思いますが、それをめぐる関係悪化という連鎖の悪循環には、一旦終止符を打つべきだと思います。そのためには、この「停戦協定」に基づいて、それを「平和協定」にしていくことが重要だと思います。残念ながら、朝鮮戦争に関しては「停戦協定」に基づく停戦体制がすでに 60 年以上持続し、平和協定は依然として締結されていません。そもそも、協定の当事者が誰であるのかという点について相互に異なる主張が依然として展開されています。私は、この問題に関する「停戦協定」に基づき、「平和協定」へと進む必要があると思います。その意味で、昨年末の合意は問題の終わりではなく、問題の始まりとして位置づけるべきだと私は考えます。

そのためには、良好な日韓関係がどうしても必要になってきます。ところが、「歴史戦」の中に問題が位置づけられることによって、むしろ、慰安婦問題が日韓の緊張を高めることに帰結しているのが現状です。問題解決のためには、日韓が協力しなければならないにもかかわらず、この問題が存在するためにそうした協力が難しくなっている、そうした状況が目の前には展開されてきたと言えるのではないのでしょうか。

もちろん、本日の基調報告やそれに続くセッションの議論では、依然として停戦協定自体を認められないという議論も出てくることは十分に予想されます。私は、この停戦協定が最善だとは思っていません。それを補完修正する必要があるとも思います。そのうえで、本日の会議では、これだけの日韓の知性が集まったわけですから、何とか知恵を集めて、この停戦協定を平和協定へと進化させるために、何が必要なのかを考える場にしたいと、主催者としては考えております。

私は、映画「記憶を生きる」で披瀝された、ハルモニたちの一言一言、一挙手一投足が胸につきさりました。また「鬼郷 (귀향)」を見て、この映画をご覧になった韓国の方々、もしくはそれ以外の方々は何を考えるのかを想像しました。そうしたうえで、何としても、停戦協定を平和協定へと進化させたいという気持ちをより一層強くしました。また、私は、つかこうへいの演劇が大好きでよく見ていますが、そこでも、この問題は取り上げられています。そうした作品の中には、問題に取り組むうえで、貴重な示唆を与えてくれているようなものもありました。

国籍が異なる、加害者と被害者という立場が異なる、そうした違いがある限りは、結局理解し合えないのでしょうか。諦めなければならないのでしょうか。もちろん、それほど容易ではないと思いますが、お互いに共感し合い議論する共通の土俵を作ることくらいはしなければいけないのではないかと思います。私事で恐縮ですが、1980年代後半、韓国が激動する中、三年半韓国に留学した私にとって、韓国社会は、深いふところ私を暖かく迎え、研究者として育ててくれました。私も、韓国社会の激しくもありながら、知的な誠実さに触れることができました。それからほぼ4半世紀が経過して、韓国社会は自由で民主的な世界に変わり、日韓関係も大きく変わりました。もちろん、それが日韓間の問題をより一層難しくしているという側面はあると思います。にもかかわらず、その時の状況と比べれば、現在の方が、自由で闊達な議論をお互いにすることができるという意味で、条件はもっとよくなっているはずで、本日の会議が、「知的な諦め」を確認する場ではなく、「知的な挑戦」の場になることを願って、主催者の挨拶とさせていただきます。どうか、一日、知的に誠実な議論をお願い申し上げます。